

## スワミの甘美な突然の慈雨

B.V. ラマナ ラーオ

私が初めてプラシャーンティ ニラヤムを訪問したのは 1966 年のことでした。それはとても重要な意味のある、記憶に残るものとなりました。しかし、私は宗教的な性質を持った人間ではなかったため、その訪問が何らかの霊性を呼び起こしたとは断言できません。にもかかわらず、次の 5 ヶ月間、続けざまに 3 回もプラシャーンティ ニラヤムを訪問するよう促されたのは、バガヴァンの神の磁力と無類の霊的愛によるものでした。私が訪問すると、いつもババ様は私を見て、「やあ、ラウディ（乱暴者）！ いつ来たのかね？」と言われたものです。この素晴らしい喜びの経験は、私をババ様の御足の元に誘いました。

### スワミによる突然の我が家へのご訪問

1968 年、ハイダラーバードを訪問されたとき、ババ様はそこに一週間滞在されました。プッタパルティに戻られる予定の二日前、ババ様が訪問を希望なさっている 8 軒の家の名前が示されました。そのとき、私はババ様と一緒にいました。ババ様はプラサーダラーオにおっしゃいました。

「あなたはこの 8 人に、スワミが明日、彼らを訪問することを個人的に内密で伝えなさい。いつになるか、時間を教えてはいけません。スワミが訪問するのは、ただ彼らの家を見届け、家族を祝福するためであると伝えなさい。親戚や友人には伝えないようにさせなさい。これは彼らだけのための訪問です。より多くの人々に伝えると、より多くの伝えられなかった人々が彼らを非難するでしょうから」

スワミは、多国籍企業で研究科学者として働いていた、マハーラーシュトラ州出身のピシュヴェカル博士だけは例外とされました。ピシュヴェカル博士夫妻はシルディ ババ様のとても熱心な帰依者でした。スワミは博士をお呼びになり、おっしゃいました。

「あなたが会社で午後から忙しくなることを知っています。10 時 30 分にあなたの家を訪問しましょう」

「スワミ、ありがとうございます。その時間ならとても都合が良いです」と、ピシュヴェカル博士はスワミの御足に触れながら答えました。

その日の午後、ピシュヴェカル博士夫妻は、私と私の妻に会いました。ピシュヴェカル夫妻は私たち夫婦に、スワミを歓迎するための伝統的な飾り方やガーランド（花輪）をお掛けするやり方、特別料理やアーラティ等の手順を教えてほしいので、翌朝 8 時半までに自宅へ来てほしいと執拗に頼んできました。私たちは親しい友人でしたので、午前 10 時 20 分までそこに留まり、スワミのご訪問の邪魔にならないよう立ち去ることで同意しました。したがって、10 時 20 分に博士の家を出ようとしたのですが、私がまだそこに居るのかどうかを尋ねる電話がかかってきました。確認の後、ピシュヴェカル博士は私に受話器を渡しました。それは、私と仲の良い、州の会長であるプラサーダラーオでした。プラサーダラーオは諭すように言いました。

「朝から一体どこにいたんだ、この間抜け者！ 自宅へ急げ、スワミが 11 時までに君の家に来られるぞ、急ぐんだ！」スワミの突然のメッセージに仰天しました。私たち夫婦は直ちにスクーターで出発しました。

何ということか！ 交通のピーク時と交差点での途切れない渋滞、なぜスワミに自宅を訪問してくださいと嘆願し、時間の取り決めをしておかなかったのかという、後部座席からの妻の口やかましい小言、愚問の連発の中、私は超特急でスクーターを走らせ、11 時きっかりに車から降りられたスワミをドアにお迎えするタイミングで到着しました。そのとき、私たち 3 人は、ほぼ同時に我が家に入りました。しかし、スワミは家の中で私たちを追い越して、小さな部屋が二つだけの我が家をすばやく見渡されました。居間には正式に飾られた小さな空間がありました。そこで妻がプージャ（礼拝）を捧げていたのです。スワミはご自分で椅子を引き寄せ、その場所の前にお座りになりました。そして、私たちにスワミの足元に座るようお命じになりました。私たちはゲストの神様にお捧げする用意もないまま、黙って従いました。

私は思い切って、お詫びしました。

「スワミ、私はこの狭い小屋にあなたをご招待する勇気がありませんでした」スワミはおっしゃいました。

「私には十分な広さです。私はサイギータ（注：サイ ババが飼っていた象）ではありません。私はもっと小さな家を訪問したことがあります。もし、あなたが友人や親戚を全員呼べば、ここは狭くなってしまいます。だから前もってあなたに伝えなかったのです」

妻は台所から軽食を持ってくると言って立ち上がりかけました。スワミは、

「あなたがピシュヴェカル家で準備したものを十分いただきました」とおっしゃいました。私は、政府がこの家を分割払いで分譲してくれたこと、家をも

う少し広くするため、近々拡張する予定であることを話しました。スワミは立ち上がりながら、

「では、次回は前もって私に来ることを伝えましょう」とおっしゃいました。パーダナマスカールをさせて頂いた後、スワミは妻にタンブラー（大コップ）に一杯の水を持ってくるようおっしゃいました。妻は、銀のタンブラーに水を一杯入れて持ってきました。スワミはご自分の指をその水に浸し、

「この水をスプーンで友人や親戚の人たちに配りなさい」と言われました。スワミは、簡素で静かなアーラティを受けられた後、車に乗って行かれました。

### 1969年のシヴァラートリの波乱の夜

1969年、私は妻と共にシヴァラートリ祭のためにプッタパルティへ行きました。スワミはしゃっくりを繰り返し、コップの温湯をすすり、その光景は帰依者たちには見るも苦しいものだったのですが、その後のバジャンの最中に、雷のような拍手の内に、水晶のリングを生み出されました。当時、マンディールの前にあったシャーンティ ヴェーディカの演壇から、スワミはそのリングを親指と人差し指に挟んでお見せになりました。そのリングは、長さが約3インチ〔約7.6センチ〕、幅が約1インチ半〔約3.8センチ〕の楕円形のリングでした。それから、スワミはお座りになり、テーブルの上に肘をついて、右手の掌にあごをのせられました。バジャンは最高潮に盛り上がっていました。私たちはスワミがマンディールの住居に戻られるのを待っていました。スワミはその場にお座りになったまま、トランス〔入神〕状態といわれる境地に入ってしまった。身体は冷たく、動かなくなり、脈拍はなく、呼吸もしていない状態でした。15分後、カストゥーリ教授、ラージャ レッディー氏、シーター ラーマイアフ博士らがパニックになり、女性の中には声をあげて泣き始める人々もいました。カストゥーリ教授は群集にバジャンを続けるよう頼みました。45分後、バジャンをしのぐ大騒ぎになっていたとき、スワミは意識を回復され、立ち上がって、拍手喝采の中を歩いて住居へお戻りになりました。

### 私の当惑と神の恩寵

当時、アシュラム内には部屋もなければお風呂の設備もありませんでした。アシュラムの外に4つか5つの藁葺き小屋があるだけで、入り口には布がかけられ、ココナッツの葉のマットで囲われたお風呂がありました。バケツ一杯のお湯が四分のールピーでした。洗濯屋がいて汚れた衣類を集め、翌日、洗い終えてアイロンをかけたものを戻してくれました。

波乱に満ちたシヴァラートリの夜の翌朝、私はいつもの小屋に帰り、洗濯屋に汚れて捨てようと思っていた衣類を渡し、お風呂を使いました。私は新しい衣類を身にまとい、急いで小屋の外を歩いていたのですが、足を滑らせてドロドロの土の上で転んでしまいました。シャツとズボンの後ろが汚れてしまいました。汚れた服のままではアシュラムに行くことができないので、私は小屋に戻り、先ほど捨てる衣類を手渡した洗濯屋を探しました。その衣類を身に着けるためです。しかし、洗濯屋はもう洗いにusstしてしまっただと言いました。私は困り果て、他に何も方法がなかったので、腰にタオルを巻き、バンヤンの木〔ベンガル菩提樹〕の枝でとめて、アシュラムへ走りしました。

不運なことに、私の妻はスーツケースに鍵をかけたまま、女性側の席へ行ってしまうていました。スワミのご講話が始まりました。私は木の茂みの後ろに隠れて座りました。御講話は、バジャン、アーラティへと続き、一時間後に終了しました。15分以上妻が戻って来るのを待っていましたが、妻は姿を見せませんでした。明らかに、妻は優雅な朝食を取りに行ったようでした。ちょうどそのとき、ヴェーダ パータシャーラ〔ヴェーダ教室〕のある学生が私を見つけ、スワミがお呼びなので、スワミの部屋に行ってくださいと伝えに来ました。妻と朝食を呪いつつ、私は熱に浮かされたように、衣類を貸してくれそうな知人を探し始めました。突然、私の目は、ラクシュマナ ラーオのスーツケースからはみ出したシャツの上に止まりました。ラーオは友人であり、私たちのサミティ〔センター〕の会長でした。そのシャツを引っ張ると、パジャマも一緒について出てきました。その時、ラクシュマナ ラーオの奥さんは私の窮状を見ていました。彼女の夫はキャンティーン〔食堂〕に行っていたのです。

そうこうするうち、また別の学生が「すぐに来なさい」というスワミのメッセージを持って来ました。「汚れていますから」という奥さんの断りにもかかわらず、私はそのブカブカの服を着ると、髪を梳かすのも忘れて、スワミの元に駆けつけました。インタビューールームに入ると、驚いたことに、そこにはよく知っている8人のVIP〔要人〕がいて、スワミは彼らに前夜の聖なるリングを見せていらっしやいました。リングは銀の皿の白いハンカチの上に置かれていました。VIPたちは銀の皿に触れて、敬意を表していました。スワミは私の方を振り向いて、大きな声でおっしゃいました。

「どうしたのですか、ラマナ！ 彼らを見てごらんない。皆、きちんとした服を着ているではありませんか。一体、何があったのです？ なぜそのような乱れた髪で、みすぼらしい服を着ているのですか？ まるでサーカスの道化師の

ようです！」

説明するには長い物語なので、私は黙って立ったまま意気消沈していました。

「チッ チッ チッ [舌打ちの音]、行って隅に立っていなさい。昨夜の神聖なリングを見せたいと思って、あなたを迎えにやったのに」とスワミは叱責を続けられました。8人が嫌悪の目で私を見ているのがわかりました。しばらくして、スワミは急に優しくなり、「見たいですか？」とお尋ねになりました。

「いいえ、スワミ」と私は本心から答えました。するとスワミは私の方に手を差し伸べて、こうおっしゃいました。

「哀れな友よ、呼んだからには、あなたをがっかりさせたくないのです」

私が前に行かなかったので、スワミはハンカチにそのリングを包み、お皿から取り上げて、私の方に歩いて来られました。そして、そのリングを私のシャツのポケットに入れてくださいました。私は当惑して、

「スワミ！ 私は欲しくありません。どうやって礼拝すればよいかもわかりません」と叫びました。スワミは私に近づき、肩に手を置いて、

「落ち着きなさい！ リングはシヴァムです。シヴァムはマンガラム（幸運）です。どのようなプージャーも必要ありません。毎朝、スプーン二杯の水を十分かけて、その水を飲みなさい。それはあなたに長寿と健康と繁栄を授けるでしょう」

私はひざまずき、スワミの御足に触れました。そして、

「スワミ、着替えに帰ってきます」とつぶやくように言いました。スワミは、魅惑的な微笑みを浮かべ、私の肩に手を置いて祝福してくださり、「行きなさい」とおっしゃいました。ドアを開けながら、スワミが他の人たちに、

「哀れな友よ！ 彼は転んだのです・・・」とおっしゃっているのが聞こえました。私はスワミの生来の無限の愛とユーモアのセンスで演出されたやり方を胸いっぱい吸い込み、かみしめながら出ていきました。自分の服に着替えた後、スーツケースの衣類の中にそのリングをこっそり隠しました。妻には話しませんでした。というのも、妻は興奮しがちで、それを展示会みたいにしてしまうからです。

## トリリングアビシェーカムの壮大な儀式

1979年10月、スワミはハイダラーバードを訪問され、10月25日、そこにシヴァム [ハイダラーバードにあるサイ寺院] の基礎を築かれました。その日、その場所はバガヴァンのご指示と祝福と神のご臨在を得て、トリリングアビシ

エーカム〔三つのリングの灌頂〕と呼ばれるユニークな儀式が執り行われました。ハイダラーバード出身の三人、すなわち、デーシカチャーリ、プラサーダラーオ、そして私（ラマナ ラーオ）は、それぞれ 1968 年、1970 年、1969 年に、スワミが物質化されたリングを受け取っていました。スワミは私たち 3 人に、それぞれ自宅からリングを持参して、銀の皿の上に置くように命じられ、スワミの御前で共にプージャーを執り行うよう指示されました。その儀式はスワミによって計画された輝かしい行事であり、5 千人もの人々に食事がふるまわれました。そのとき、スワミは寛大にも私たち 3 人に、毎日のプージャーのための銀の皿と銀の品々をプレゼントして下さいました。スワミのご指示を受けて、私の両親もカキナダ〔アーンドラ・プラデーシュ州 東海岸の町〕から来ていました。

### もう一つのスワミの我が家へのご訪問

バガヴァンがプッタパーティに帰られる予定になっていた前日、バガヴァンタム博士はバガヴァンを自宅の昼食に招かれました。それは素晴らしい 20 皿のフルコースのランチでした。昼食後の午後 2 時、車に乗られる直前にスワミは私をお呼びになり、肩に手を置いて耳元でささやかれました。

「私は、午後 8 時にあなたの家へ夕食に伺います。両親が来ていますね、彼らもアーナンダ〔至福〕を分かちあえるでしょう。あなたは準備できるはずですよ。これは私の事前の約束でした。シンプルにしてください。あなたの家族だけに限りなさい」

スワミの恩寵の慈雨は本当に突然です。

「スワミ、ありがとうございます。準備いたします。私の 2 人の息子を含めて、あなたに同行してきた 8 人の学生さんと、それからオーガニゼーションの何人かの要人たちを呼ぶことを許していただけませんか？」とお伺いしました。すべてをご存じのスワミは、

「テラスに用意なさい。50 人ぐらいは入れるでしょう。月明かりの下での夕食になります」とおっしゃいました。私はスワミの御足に触れ、スワミは私の頭に手を載せて祝福して下さいました。

兄弟たちやセヴァダル仲間たちの助けにより、テラスは明るく飾りつけられました。スワミは几帳面に午後 8 時にお越しになり、すべての招待客らにテラスに出て座るよう指示されました。一方、スワミは約 20 名の私の家族が整然と座っている一階の部屋の中に入って行かれました。スワミは夕食後にまた戻っ

て来ると家族に告げられました。ババ様の計り知れない恩寵によって、それはすべて自家製の、簡素で喜びに満ちた月明かりの下での晚餐となりました。母と妻はスワミにお給仕しました。48名のほとんどは私たちのオーガニゼーションから参加した人々で、みんなテラスにしゃがんで座っていました。スワミは快活な調子で一緒におしゃべりを楽しまれ、ジョークを飛ばしていらっしやいました。

午後 8 時半、スワミは私の父と母、そして妻に階下に行って待つようにおっしゃいました。スワミはそこ（テラス）に 9 時 5 分まで座っていらっしやいました。それから、スワミはとても優しい、忘れられない言葉を述べられました。

「あなた方は手を洗わずに座っていたので、両手が乾いてしまいましたね。私が階下に降りた後、皆さんも降りて手を洗い、まっすぐ自分の車に行って車の中に座りなさい。一階には待つための場所がありませんから。私があなた方とここで一時間を過ごしたのはそれが理由です」

お優しいスワミは、その後、私たち家族の面々とも 20 分ほど過ごしてください、車にお乗りになる前に、パーダ ナマスカールを与えて祝福してくださいました。

出典：『サナータナサーラティ』2012 年 4 月 特集号